

國學院大學學術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウエン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

第5回国際シンポジウム

神道研究の国際的ネットワーク形成

(研究フォーラム)

開会の挨拶

井上順孝（実行委員長）

【井上】 おはようございます。昨日はシンポジウムを行い、本日は2日目ということで、研究フォーラムという形で続けさせていただきます。

昨日は、6人の発題がありました。それぞれの立場からいろいろな問題提起、現状確認がなされました。本日は、それに基づいて今後の研究ネットワーク形成、さらには具体的な研究の内容、そして、それを行っていく上で、システム上、あるいは研究上、具体的にどのような素材を構築すればよいのか、という話を、フリーディスカッションという形に展開させていきたいと思います。

本日は、3部構成になっています。午前中の「日本側の計画に基づく討議1」では、主に、昨日私が紹介いたしました英訳オンライン版『神道事典』（以下、EOSと略記）の構築作業にかかわっているスタッフを中心にして、現在行っていることの紹介やEOSをどのように展開していくべきかということについて、それぞれの方から簡単にお話いただき、ディスカッションをしようと思います。

現在、国学院大学では、日本文化研究所関連のCOEプロジェクト、学術フロンティアに採択されたプロジェクト、さらにはほかの総合プロジェクトなどが行われています。このような状況の中で、もうすぐ設立される学術メディアセンターでは、これらを総合的に展開させようという意図がございます。午後の「日本側の計画に基づく討論2」では、このようなプロジェクトに関わっている方々がどのような計画ないし希望があるかということもお聞きしたいと思います。さらに神道研究を、狭い意味の神道研究ではなく、広い意味の神道研究——フォークロアや考古学、歴史学、そのほかいろいろな周辺分野——と関連づけて、将来の展望ということも提起していただきたいと思います。

午後の2つ目は「自由討議」です。これは「日本側の計画に基づく討論1」、「日本側の計画に基づく討論2」が国学院側の発題ですので、国学院大学の外部からのおふたりに、発題をお願いしました。外部から見た場合、現在我々が行っていることはどう見えるかということと、さらに、これを国際的あるいは国内の諸機関と連合して展開していくには、どのような視点をつけ加えなければいけないかということをおっしゃっていただきたいと思います。さらに昨日発題された方々にも、それぞれの国の状況から、現在進行しているプロジェクト、あるいはこれからのプロジェクトに対してご意見をいただければと思います。

私は、このようなことを進行する上で、やはり一番中心になるのは人であると思います。人のネットワークが築かれること、これが一番重要だと思います。ただ、人といってもやはりその背後には研究機関がある。その人は、大学なり、研究機関なり、学会なりに所属している。人と人がつながることによって、その背後にある機関もつながる。これが研究の発展には重要であると思います。

それから、これらの人が研究を公開するときに、今後の研究や教育に対してどのようなもの——コンピュータの世界ではコンテンツ——を構築することがこの分野での貢献になるのか、研究の成果、対象、内容を検討する必要があります。そして、これを新しいツールを利用して公開する場合、どのようにすれば研究内容をより効果的に公開、共有できるのか考える必要があると思います。本日の議論には、このようなマクロな問題が非常に重要な課題としてあります。私としては、1つでも2つでも、具体的な方法やプロジェクト、そして国際的ネットワークの構築に関して明確に見えてくるとありがたいと思います。今後の国際的ネットワーク構築にとって、このような議論は有意義であろうと思いますので、いろいろな議論を自由にしていきたいと思います。

記録には一応とどめ、後日、冊子にする予定ですが、フリーディスカッションですので気にせずご発言いただきたいと思います。国学院に対する批判的なものでも遠慮なくおっしゃっていただいて、とにかく実を上げるということに一番重点を置きたいと思っております。

それでは、早速第1部の討議に入ります。おひとり短く5分ないし10分をお願いしております。厳密な時間設定ではありません。順番も任せてあります。進行方法としては、おひとりに発題していただき、事実確認などの簡単な質疑応答、もしなければ次の発題に移っていくという形にいたします。全員の発題が終わったところでフリーディスカッションをいたします。それで1つのセッションを終えることにいたします。これを3つのセッションで行いたいと思いますので、質問の仕方もそのようにしていただければと思います。

日本側の計画に基づく討議 1

ノルマン・ヘイヴンズ

(事業推進担当者・国学院大学助教授)

遠藤潤

(事業推進協力者・国学院大学日本文化研究所助手)

平藤喜久子

(事業推進協力者・国学院大学日本文化研究所講師)

武井順介

(国学院大学 21 世紀 COE プログラム研究員)

エリック・シッケタンツ

(事業推進協力者・国学院大学日本文化研究所調査員)

発題

ノルマン・ヘイヴンズ

【ヘイヴンズ】 おはようございます。

昨日、みんなと話していたのですが、明日はどうしようか、何を言おうか、本当にこれが困るんですよねというふうに悩んでいたんです。ブレインストーミングという形でしゃべることは、かなり難しいと思うんですね。



それはさておいて、私は、翻訳者、あるいはこのEOSの編集においてつくづく感じるようになってきたのは、それぞれの項目〔エントリー〕を書いた著者の暗黙知として当たり前と思っている部分ですね。つまり、日本人として明示しない部分と、そのターゲットランゲッジ、つまり英語圏の人たちの期待との間のギャップですね。やはり、日本人の読者に対してその暗黙知として明示しなくてもいいということはいっぱいあるんですけども、実際に翻訳するとなると、それを明示しないと意味が伝わらない、意味がわからないんですね。だから、翻訳に当たって、どの程度手を加えて原文を変えていいのか、編集者、翻訳者として一番考えるところだと思うようになりました。

これは、より一般的な問題として考えると、いわゆる発信側と受信側のギャップですね。こっち側で、日本、ほとんど日本人ですけど、日本人が発信したい、あるいは外国人に伝えたいという情報と、逆に相手側が考えている期待（受けたい情報）との間にはやはりギャップがあるんですね。つまり発信側と受信側の考えていることや期待していること、あるいはその暗黙知が同じではないということです。

EOSの場合には、すでにでき上がっている日本語版の『神道事典』があつて、そしてそれをただ翻訳するというのがもとのプロジェクトでした。最初は翻訳するというプロジェクトでしたのであまりその内容をいじることは考えていませんでした。もとの文章につけ加えたり、文章を変えたりするというような変更が多すぎると、やはりもとの著者との間で問題になるんですね。しかし、実際の問題として、昨日も言われたのですけれども、事典の項目自体が、かなり古くなっているところもあるのです。今から見れば最先端の研究でなくなっているところも結構あるわけです。また日本人が発信したいというスカルシップ、研究と、アメリカ、英国などヨーロッパで受けたいという、あるいは知りたいという問題意識との間にはギャップがあるわけです。

このようなギャップを埋めるというか、状態を改善する1つの案として、ここで「宝石の小平面」というメタファを考えたいのです。辞典や百科事典を一般的に考えると、それぞれの項目の内容ができ上がった時点で最新の研究で、完結した作品として考えられることが多いかと思います。書かれているものは最終的なものだ。しかし事実として、それぞれの著者のエントリーの内容は、その「課題」のひとつの「小平面」に過ぎないとも考えられます。つまり現実にはいろいろな小平面（見方、捉え方）があるんですが、この著者は自分の立場である「小平面」だけを提供する。他の人の立場から見れば、その課題が違ふように見えることは当然でしょう。だから、1つの課題を説明するとき、項目を1つだけではなくて、複数のエントリーを提供することによってより完全な「宝石」になるのではないかと思います。

例えば、複数の人が「神」という課題について書けば、それはそれぞれの立場から書くという意味ですね。あるいは「神社」について、日本人の書いた項目の隣にイギリス、アメリカ、フランスなどの人が書いた項目を配置する。そうすれば、これらの違ふ「小平面」の組み合わせというか、全体として、より完全な「宝石」となるのではないかと思います。

ここでいう小平面というのは小さな平らの面のことで、「ファセット」(facet)という英語ですね、宝石のファセット。先ほども言いましたように、それぞれのエントリーをすべて書きかえるよりも、別の人の新しい項目をつけ加えることですね。新しい人によって新しい項目をつけ加えたら、ある意味でもとのエントリーを補う新しい「ファセット」となるのではないかと思います。

また昨日、ウィキペディアというひとつのモデルが提示されました。これはひとつの知識のモデルとして理解していいと思いますが、完全にウィキペディア風に辞書を書くと、やはりいろんな問題があるのです。だれが何をどういう権威で書いているか全くわからないから。ウィキペディアはそういう制限ができないんです。最近の、特に時事問題を取り上げるウィキペディアの項目を見ると、「アメリカ」とか「イラク」とかという項目はかなり混乱していて、それらを書き込み禁止としなければならなくなっているんですね。そうしないと政治的な意見や偏見が入り込んで、もう瞬間的に変わるようになるんですね。だから、もう1つ、それに近いけれど違ふモデルとして、チャールズ・ミュラー(Charles Muller)の *Digital Dictionary of Buddhism* (仏教電子辞典 <http://www.buddhism-dict.net/ddb/>)

があります(図6)。チャールズ・ミュラーも、15年ぐらい前から1人でこの辞典を編集しはじめようとしたのです。彼は主に東洋の仏教に関心を持っているのですが、どんどん大きなプロジェクトとして成長するにつれて、ほかの人、例えばインドの仏教とか、スリランカの仏教とか、パーリ語の南部仏教ですね、そういう専門家からもコントリビューションを受けるようになったんです。しかし、どういうふうにこれらのコントリビューションをコントロールしているかというと、パスワード・アクセスという、パスワードによってコントロールしています。一般的な人は、24時間の間には10回検索が自由にできるんですが、もっと使いたい人であれば、これに参加(コントリビュート)する義務があるわけですね。参加型で、つまり自分で250単語以上の記事を書き込むことによって2年間の自由アクセスが与えられるようになります。あるいは、自分は書けないけれども、自由アクセスが欲しいときは、110ドルを払えば2年間の自由アクセスがもらえます。つまり、このサイトにはいくつかのアクセスの仕方があるんですね。

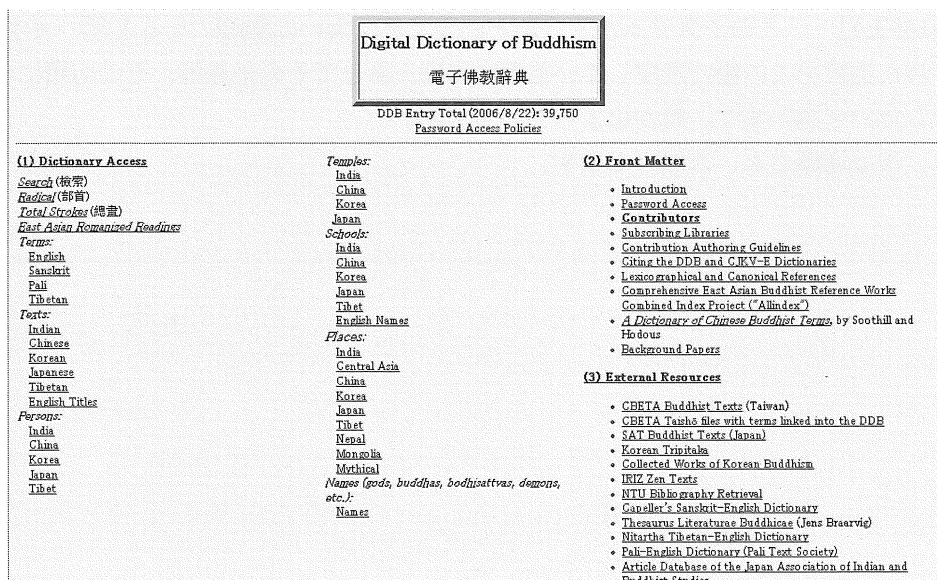


図6 デジタル・ディクショナリー・オブ・ブuddiズムのホームページ

そして、ミュラーさんに尋ねたんですけども、完全にウィキペディア風にするためちやめちやな内容になりかねないので、どうやってそのコントリビューター、項目を書く参加者をコントロールしているのかと尋ねました。彼が言ったのですけども、全部一元的に自分で判断してコントロールしているという。よくよく聞いてみると、コントリビューターたちはちゃんと学者ですね。新しくコントリビューターになりたい人をミュラーさんが調べて、そしてちゃんとした人であれば参加していいという許可制をとっているわけですね。だから、いろいろな人、いろいろな立場から記事を書くことでフリーアクセスができるんです。これはEOSにはおそらくそのまま使えないモデルですけど、1つのアイデアとして、いくつかのアクセスレベルを設定して、特別なアクセスを与える代わりに記

事を書いてもらうとか、それは1つのアイデアとして提供します。

では、私の5分が終わりましたので、次の人へ。

【司会(井上)】 その前に、もしヘイヴンズさんがおっしゃったことで、用語がよくわからなかったとか、意味がわからなかった点がございましたらお願いします。事実確認とか、ありますでしょうか。

【黒崎】 先ほどの、その宝石の小平面という話がありましたけれども、それは、具体的なその提案としては、神社について複数の著者がエントリーを書くということですか。

【ヘイヴンズ】 神社という項目、記事といいますか、その項目はすでにあるんですけども、それは1人の日本人研究者が書いたものです。そして、その人の立場から書いたものですのでそれに加えて、その隣に、あるいは次に、アメリカ人などが書いた「神社」という項目を付け加える。それは、日本人が書いた「神社」というエントリーを補う、もしくは、意見が違うところについて説をつけ加えるということですね。そうすれば、より総体的に神社という概念が描かれようになり、理解できるのではないかと思いますね。

【司会(井上)】 このシステムがどうかということは大いに議論になると思いますので、提案された趣旨をこの場で理解していただければ、あとでその是非等、その応用について議論をしたいと思います。ほかによろしいですか。

では、次は遠藤さん、お願いします。

発題

遠藤潤

【遠藤】 遠藤です。簡単にお話をさせていただきます。

私の場合、『神道事典』の英訳では、翻訳支援ということを中心に参加をしています。その面から出てきたことを少しお話をして今後につなげたいと思っています。



翻訳支援という形で、最初、掲示板システムを使用して、海外の翻訳者から質問を受け付け、私と平藤さんがその質問に答えるというようなことを一時かなり集中的にやっておりました。そのときに出てきた問題点としては、翻訳者の人たちが海外各地に広くいるので、翻訳者のほうの前提知識というところもやはりばらつきがあるという点がありました。たとえば、日本で作業していれば基本図書で調べて済むようなことを質問をする人もいれば、他方で、学術的に非常に高度な質問をされる人もいました。今後についていうならば、翻訳のプロジェクトを進めていく際には、そのような基本図書を日本側から積極的に提示をしていく必要があるだろうと思います。神道に関する文献を翻訳するのであれば、やはりこの事典、この文献はきちんと調べた上で翻訳をしてくださいという、そのようなガイドラインをある程度明確にする必要があるのではないかと考えています。

『神道事典』英訳で採用した掲示板システムは、非常にうまく活用できるシステムで、時間をとらず質問を受け付けられてこちらでも答えられたので、かなり有効には機能したと思いますが、これから事典が日々更新していくものになることを考えると、掲示板を使う部分と、どこかの段階でエディターのような立場の人が確定した原稿を構築していく部分

の両方を確保して、そのような仕組みとしてきちんとつくっていく必要があると思います。

それから、翻訳に関しては、この事典の作業を進めていく中で、最終段階での日本で英語話者の人たちがやっている作業というのを見ると、最後の段階での負荷というのが非常に大きくなっています。つまり、彼らの作業は、内容の検討から、書かれた英語の質から、いろいろな多面的にわたっています。そういうコストを、これからの翻訳作業の中で減らしていくためには、早い段階に、訳者にサンプルの翻訳というのをやってもらう、あるいは、定期的にサンプルの形で一部翻訳をしてもらい、日本側もそれを検討して、こういう種類の翻訳にしてほしいんだということを、わりあい早い段階で翻訳者の人にも伝えていくという仕組みをつくっていけば、最後の編集の段階にかかるストレスというものをもう少し軽減できるのではないかと考えます。

それから、最後に、ごく簡単にもう1つお話をすると、その事典をこれから英訳をしていくときに、日本語の記事自体の更新ということも必要になってくると思います。先ほどヘイヴンズ先生がおっしゃっていたように著作権の問題がありますので、事典の本文を改変していくことはできませんが、掲示板での議論などを利用しながら、最低限必要なものについては、日本語による追加の記事を掲示板の形でも出していく必要があるかもしれません。そのことによって『神道事典』の日本語のほうの質も上っていくと思います。このような方法により、英文のEOSが進化や発展をしていく一方で、日本語の『神道事典』も改善されていく、ネット上でそれを補足していくようなことというのは可能になると考えています。

実務が中心の話でしたので、今後への提案としては地味ですが、私が考えたのは以上のようなことでした。

【司会（井上）】 ありがとうございました。

今の遠藤さんのお話、特に質問はございませんか。では、続いて平藤さん。

発題

平藤喜久子

【平藤】 日本文化研究所の平藤です。

私は、『神道事典』オンライン版のEOSの編集のお手伝いをさせていただいております。今回は、持ち時間が5分と短いので、今後の展開について2つほどお話しさせていただきたいと思います。



EOSは、先ほどヘイヴンズ先生もおっしゃいましたように、もう既にでき上っている日本語の『神道事典』を翻訳していますが、この日本語の『神道事典』は、ある程度神道について知識がある人を読者として想定しており、実際にそういう人たちが活用していると考えていいでしょう。EOSは、その事典を英語にしたものですから、やはりある程度神道について知識がある人でなければ利用しにくいものとなっています。昨日、魯成煥先生が韓国の方々が日本に旅行して神社に行って、板に何かお願いごとをしたと言っていたというエピソードを紹介して下さいましたが、その板が何かということは、EOSでは引くことができないわけですね。「絵馬」という言葉を知っていないとこの事典で「絵馬」を引くことができないということになります。私が考えましたのは、英語で発信するからには、ここにある程度ほんとうに神道に関する入門的な案内、神社に行ったことがない人が絵馬について知ることができるような案内がこのEOSにあればいいのではないかというふうに思いました。

具体的には、例えば、それを新しくつくるということではなく、仮にこのようにつくっ

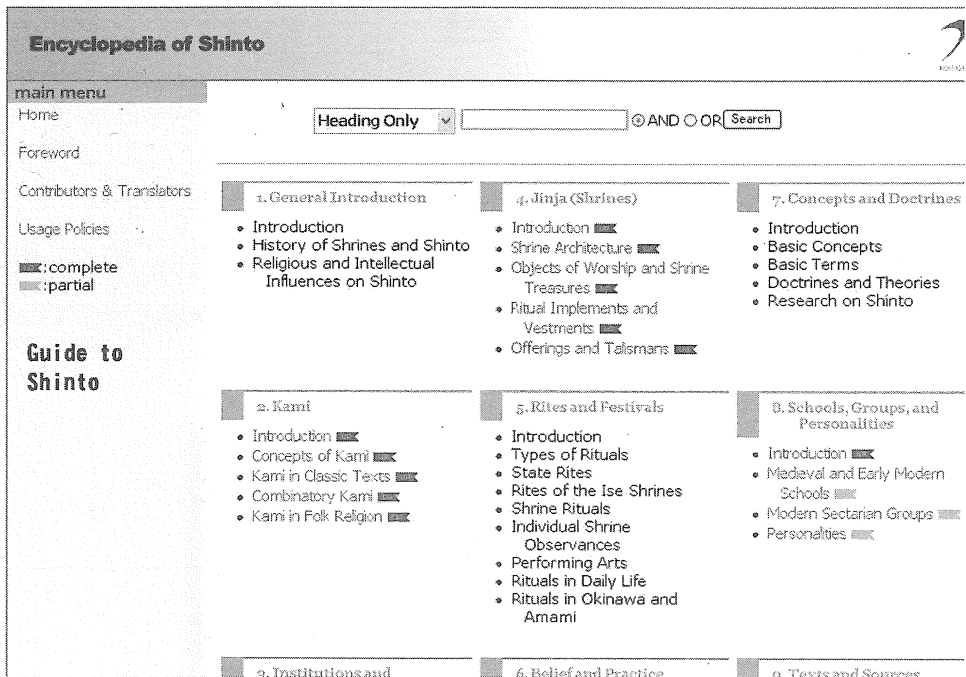
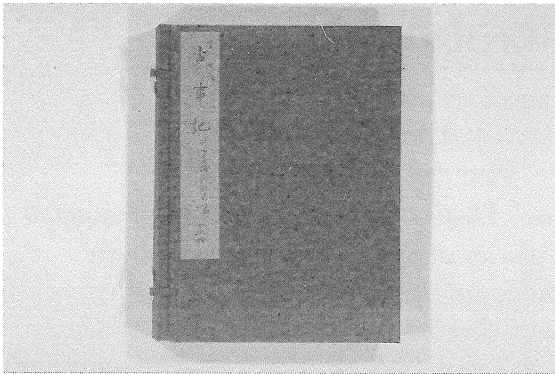


図7 Guide to Shinto の表示例

てみましたが、EOSのトップページの中に、例えば Guide to Shinto とか、Guide to Jinja というようなコーナーをつくります(図7)。今回は神社本庁の子ども向けのサイトから絵だけとって仮のページを作りましたが、実際は自分たちでつくるといいと思います。このように神社の配置が絵で示してあって、そしてこれ何だろうと手水舎のところをクリックするとこの事典の項目に飛ぶようにします。ですから、新しくつくるというのではなく、事典の項目をより入門者が、初心者が使いやすい形にこちら側でコースをつくってあげるといいのではないのでしょうか。項目を初心者用コースに配置することにより、事典の利用範囲が広がる、そういう仕組みをつくってはどうかと思いました。そのコースだけに限れば、例えば、韓国語にするとか、中国語にするといった、ことも簡単ではないか。神道の情報発信としてはいいのではないかというふうに考えました。そこからリンクして、事典の項目からさらに深く知りたい人は勉強していけるとと思います。

あと、もう1点ですが、来年度からデジタルミュージアムというのを国学院大学ではつくっていきます。日本文化研究所のプロジェクトとしても立ち上がっていきます。このことについてお話しします。今、このEOSというサイトは、それだけで1つの完結したものになっています。例えば、国学院大学には、デジタルライブラリー・コレクションというのが図書館でできています。これは、いろいろなものがあるわけですが、こういうものとEOSというのはリンクしていません。こういうものとEOSがつながっていくということ、それが大学の情報発信になると思います。海外に向けても、こういうものを国学院大学は持っていますよという紹介になるのではないのでしょうか。

春満訓点 古事記 三冊 寛永21年(1644)刊

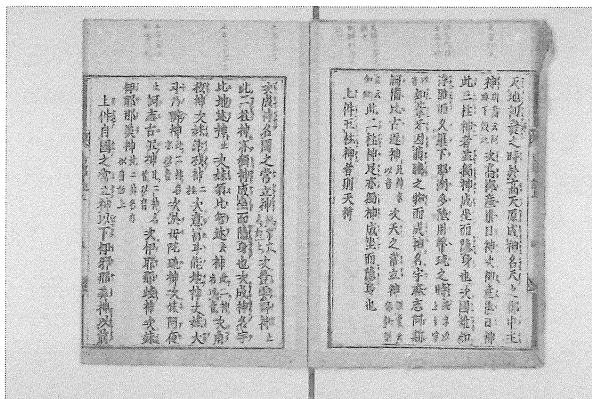


掲出本は、寛永21年(1644)の板本に荷田春満が書入れをした古事記を源吉賢が写したものの。源吉賢は三河宝飯郡の出身で天王社神主を勤仕した人物で、鈴木梁満の門弟である。梁満は本居宣長に師事し、三河吉田に国学を起した人物として高く評価されている。梁満の写本は阪本龍門文庫にある。本書の体裁は縦 27.2 糎、横 19.2 糎。四ツ目袋綴。

尚、この本は「校訂荷田春満書入古事記」(中村啓信校訂)として『國學院大學日本文化研究所紀要』第54・59・61輯に翻刻されている。
(貴1914-1916)

図8 荷田古事記の大学サイト紹介例

春満訓点 古事記 三冊 寛永21年(1644)刊



[原文](#)

[書き下し](#)

[English Version](#)

[関連する授業](#)

[関連する研究業績](#)

[関連する刊行物](#)

[学内の関連プロジェクト](#)

図9 荷田古事記の大学サイトの改変例

Kojiki

translated by Basil Hall

Chamberlain

The names of the Deities that were born in the Plain of High Heaven when the Heaven and Earth began were the Deity Master-of-the-August-Centre-of-Heaven, next the High-August-Producing-Wondrous Deity, next the Divine-Producing-Wondrous-Deity. These three Deities were all Deities born alone, and hid their persons. The names of the Deities that were born next from a thing that sprouted up like unto a reed-shoot when the earth, young and like unto floating oil, drifted about medusa-like, were the Pleasant-Reed-Shoot-Prince-Elder Deity, next the Heavenly-Eternally-Standing-Deity. These two Deities were likewise born alone, and hid their persons.

The five Deities in the above list are separate Heavenly Deities.

More info → [Encyclopedia of Shinto](#)

図 10 リンク先の英訳表示例

そこで試作品としてあったら便利だなと思うものを作ってみました。これは大学が持っている例えば荷田古事記です (<http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/diglib.html>)。大学ではこのように簡単にしか紹介はしていませんが、これをさらに原文を載せ、英訳——これはチェンバレンのもので——を載せて、その神名がEOSのほうにつながっていくというふうになると、非常に使いやすいと思います (図8、9、10)。もちろん全ての資料についてやっていくのは大変な作業ですが、例えば、デジタルミュージアムという形になって、それが実際の企画展示、たとえば荷田春満の実物の展示とデジタルミュージアムでの特別企画みたいなものが連動して、それでEOSがそれにかかわっていくという形になっていくと、より総合的な情報発信になっていくのではないのでしょうか。それが、例えば関連する授業のシラバスにリンクするとか、関連教員の業績に飛んで、しかも中身を見ることができるといったような形になっていくと、大学全体の情報発信にEOSがかかわっていくということで、より大学の海外に向けての宣伝にもなり、貴重な文献の紹介もできます。そして EOS がより深く発信できるという形になっていくのではないかというふうに考えました。

以上で提案を終わります。

【司会 (井上)】 ありがとうございます。

今の紹介に対して、何か確認したいところとかございますか。

【テーウエン】 提案とおっしゃいましたけれども、もうできていますよね。いや、何

かもうできているように見えたんですけども。今は、もうそうなっているんですか。

【平藤】 いえ、全く私のつくったもので、こういうふうになったら使いやすくないですかという提案です。

【司会（井上）】 サンプルページです。

【テーウェン】 わかりました。

【平藤】 サンプルなので、いやこういうのは要らないというふうなお話になるか、あったらいいなというお話しになるか、聞いてみたいと思いました。

【テーウェン】 すごいですね。

【司会（井上）】 ほかはよろしいですか。

発題

武井順介

【武井】 COE研究員の武井順介と申します。よろしくお願いします。

昨日の先生方のご発題を受けて、コンピュータやネットワークシステムにどのようなことができるのか、現状のEOSの紹介も若干させていただきながら、提案させていただきたいと思います。



現在、EOSは、テキスト、画像、音声、動画を配信しています。テキストの内容、画像、音声、動画の数というものは日々更新されておりまして、内容もどんどん増え、あるいは新しくなっています。

さてこれからの発題では、現在公開しておりますシステムを使っていろいろなことができるのではないかと提案をさせていただきたいと思います。

昨日は井上先生から、今日はヘイヴンズ先生からウィキペディアの話が出ていました。例えば、「神道」という語はウィキペディアに登録されております(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E9%81%93>)。その内容に関して、これが信頼できるもの、信憑性があるものとするのは少し難しいかもしれません。だが、今後EOSで発信をしていく情報——ちよっともとに戻ります——EOSでやろうとしていることは、専門的な研究者による検討を経た上で情報発信をしていくということです。これは、昨日私が井上先生に質問させていただいたこととも関係ありますが、EOSは複数の専門的な研究者が共同して情報発信をしているため、一応信憑性が高く、それだけに信頼

性がある程度担保されていると思います。一方、研究者がウィキペディアを使って論文を書くことはおそらくないと思います。信憑性、信頼性が担保されていないからです。ここから、利用主体はだれなのかという問題が出てきます。ウィキペディアはおそらく主に学部学生や一般の人が利用するというので、信憑性が低くてよい、という語弊を与えますが、ウィキペディアの場合はある程度そういうことになっているような雰囲気があると思います。ただし、EOSのように、研究者が内容の検討をして情報発信をしているものは、だれに利用してもらいたいのか、ある程度設定されていることが多いと思います。EOSを作っているわれわれとしては、一般の人たち、学生たちに利用してもらいたいとも思いますが、やはり、ある程度は神道に関して研究をしている人に対して情報発信をしているようにも思います。この点がウィキペディアとの違いではないかな、と昨日のご発題を受けて考えるようになりました。

さて、以下はEOSの可能性ということで、幾つか提案というか、思ったことを発言させていただきます。

まず、現在、国学院大学には幾つかのデータベースがあると思いますが、それらのほとんどは単体として機能していると思われます。例えば、現在、国学院大学にある神道・神社関係データベース、国学者データベース、さらには図書館の蔵書システムもそうですが、それらは全て個々の独立したものとして機能しています。利用する立場からしてみると、それらのデータベースは連携しているほうが使いやすい。例えば、現在利用されているデータベースのほとんどは、リレーショナル・データベースというような言い方ができるものです。無論、データベースは単体で使っても問題はないのですが、別のデータベースとリレーショナル、つまり連携して利用することもできるのです。ゆえに、国学院大学が持つ1個1個のデータベースをさらに連携させていく必要があるのではないかと思います。

これに関してですが、例えば、全て同じデータベースに情報を入れるというのではなく、検索システムを同じにする、あるいは、外部から見たときにデザイン、テンプレート等がばらばらだと利用する人も利用しづらいということで、統一規格を学内で設けて、それを外部からも利用できるような形にしていく。そうすると、ユーザー側も、1つの検索システムで神道・神社関係、あるいは神社に関する用語、国学者などを同時に検索できるとより利便性が高まるのではないかなと思います。それと、これは確認をとらなければいけないのですが、実在する神社のホームページ、あるいは他機関とのリンクなど、これは先ほど平藤さんがおっしゃっていましたが、そのようなコンテンツも充実させていく。EOSですとかなり柔軟なシステムを使っておりますので、そういうことも可能であろうと思われます。

さらに、最近、日本の大学では、eラーニング、Webラーニングというものが注目を集めています。つまり、EOSを活用して授業を展開していく。これは学内だけではなくて海外に対してもやっていけるのではないかなと思っています。神道、日本文化教育の資料としてワールドワイドにEOSを使用していく。例えば、国内、学内の教育という観点

で言いますと、語学教育の1つとして神道の用語を英語で学生たちに提示していくことによって、語学、教養的な部分から神道というものを理解させることができるのではないかと。これは神道・日本文化に関する基礎教育とも言えると思います。これを行うことによって全員が研究者になるということは思わないですが、ただ神道・日本文化に対する教育のボトムアップにつながるのではないかと考えています。

また、話が飛んでしましますが、昨日のグリーン先生、ナカイ先生、井上先生からも出ていましたが、フォーラムという話題、議論の場としてのネットワークシステムというものを考えてみました。おそらく対面的な議論というものは辞典をつくる上でも不可欠な作業だと思います。ただし、これには物理的な距離の問題と時間的な制約があると思います。そんなときは、ネットワークシステムを用いた議論が有効になってくる。そうすると、ある程度はその制約が回避できると思います。このシステムの構築はそれほど難しくないことです。

ただし、一番問題となるのが、このフォーラムにかかわる人たちの主体性——昨日もナカイ先生がおっしゃっていましたが——突然議論を中止したり、あるいは特定の人しか発言しなかったり、ということはフォーラムの運営上好ましくありません。これと同じようなことは、私の経験上でも多々ありました。結果的にフォーラムがなくなるということもございました。だから、そこにはある程度の強制力を働かせた形でもいいと思いますが、結局、主体性というものが問われる。フォーラムを続けていく、議論を続けていくには主体性が問われる。実は、この主体性という課題は技術的な側面では解決できない部分を多く含んでいるという意味で大きな問題です。

また、昨日、井上先生もおっしゃっていた、どこまでサイトを開放するか、について触れさせていただきます。この問題はどこに向かってこちらが発信しているのかということに関わります。研究者に向かって発信しているのであるならば、議論の場というものは研究者のみに開放していく。一般の人たちも対象にしているとしたら、一般の人たちにも開いていく。ただし、そうすると多くのメールやら議論の分散化という課題が出てきてしまう。そこで、一般の人たちや学部学生など——神道・日本文化研究における基本的な前提というものをあまり共有していない人たち——と議論する場合、重要案件のみをそのフォーラムに立ち上げて議論に加えていくというふうな形をとれば複雑にならずに済むのではないかと思います。

先ほども言いましたが、これらのことは、システムのあるいは技術的には、簡単とまでは言わないですが、可能です。ただし、一番の問題が、維持・管理・運営のための人的リソースが一番問題だと思います。国学院大学は人文系大学ということで、プログラムあるいはホームページを維持・管理する人材はなかなかいないと思います。ですが、できれば学内からそういうことができる人を輩出し、神道にも精通していて、維持・管理・運営もできる。このような人がいることが好ましいとは思いますが、ただ、現状としましては、あまりそのような形にはなっていないと思います。この維持・管理・運営というのが、実際にやっていく上で一番重要なことではないかと思います。この問題が何とか回避できれば

うまくいくのではないかなと思っております。

ちょっと長くなりましたが、以上です。

【司会（井上）】 ありがとうございました。

では、ただいまの武井さんの発表について、確認したいことがございますか。よろしいですか。

それでは、次にエリックさんをお願いします。

発題

エリック・シッケタンツ

【シッケタンツ】 おはようございます。日本文化研究所の調査員のエリック・シッケタンツと申します。

いまようやく画面が映りましたね。先ほどは開かなかったので、もうだんだんパニックになってしまったんですけれども。



さて、私は普段『神道事典』の英訳作業をさせていただいています。昨日、グリーン先生からの発題で「日本人研究者との交流できる場があれば」という発言を聞きまして、今回はそのテーマについては言及してみたいと思います。こうした交流の場を考えると、グループブログという様式が適切なのではないかと思いました。そのために、今日はグループブログのメリットとデメリットを簡単に話しながら、具体例としてあるブログを紹介したいと思います。

こちらは、「Frog in a Well」(<http://www.froginawell.net/>) というブログなんですけれども、実はこのブログ、私の友だちであるハーバード大学の博士課程3年生が、その友だちと結成して作っているものなのです。内容としては、韓国、中国と日本における近代史を対象にしております(図 11、12)。このサイトは、3つのページに分かれています。つまり、韓国、中国と日本のページなんですけれども、韓国のページでは韓国語と英語で書き込めることになっています。中国のページは中国語と英語で書き込めることになっています。日本の場合も同様で、日本語で書き込むことが可能なんです。つまり、自分の研究

の対象になっている国の言葉が少なくとも読めることがサイト使用の前提となっています。

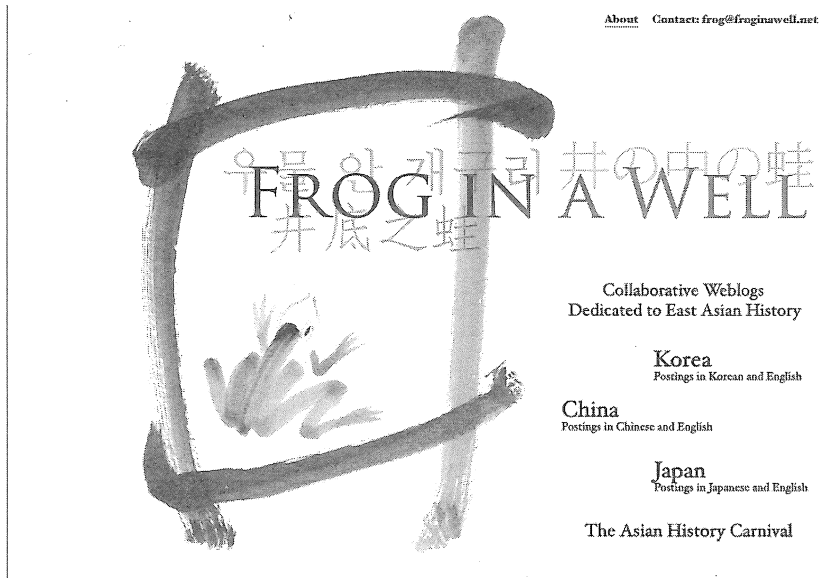


図 11 「FROG IN A WELL」のホームページ

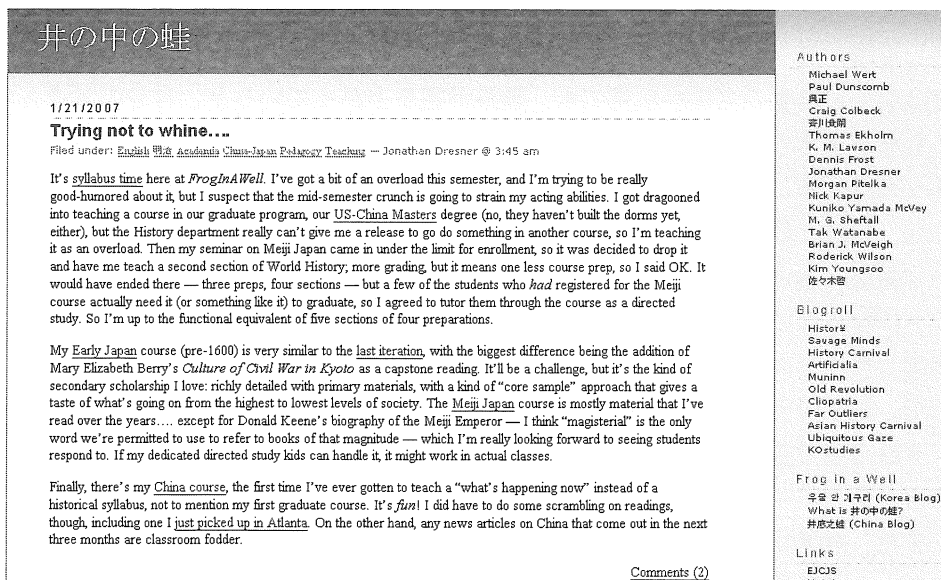


図 12 「FROG IN A WELL」の日本研究ホームページ

例えば、日本のページを開いてみれば、こうなっています。右側にこのサイトのメンバーリストが載っています。大学院生がこのサイトの中心になっていますけれども、最近は、いろいろな先生方も関わってきて、例えば、文化人類学のブライアン・マクベス先生など

がいます。そして、アメリカの大学院生だけではなく日本の大学院生、韓国の方もいます。このメンバーたちは「Author」と呼ばれており、メンバーだけが書き込むことができます。だれでも見ることはできますけれども、書き込むことはこのメンバーたちに制限されています。

書き込みの内容は普段短いエッセイという様式になっていますけれども、メンバーたちが最近何を考えているか、最近何を気づいたか、最近読んだ本に対する感想などについて書いて、コメントをします。こちらの書き込みでは1つのコメントしか載っていないですけれども、メンバーではない人たちがそれを読んで、書き込みについてコメントをすることができます。それによって議論が行われます。これは、意見交換上で、大変有意義な方式だと思います。つまり、今までのメーリング・リストなどを見れば、まとまったような議論の仕方は少ないと言えらると思います。つまり、1つのテーマに関するコメントはスレッド式になっていないですから、議論がばらばらになってしまっ、読みにくくなっています。そして、「Frog in a Well」では日本語で書き込むこともできますので、英語に自信のない人は気軽に日本語で書き込んで、あるいはコメントをすることができます。つまり、日本人も海外の研究者も気軽に自分の得意な言葉で自分の意見を表現できるようになっています。

このサイトは幅広く日本の近代史にかかわるさまざまな課題が取り上げています。また、メンバーの書き込みの順番が決まっておらず、何か書きたいことがある時に、それを書き込むということになっています。海外の研究者たちと日本人の研究者たちが直接交流できる場としては、こういう場があればとてもいいと思います。これは、研究者たちにとってだけではなく、学生の立場から見ても、議論が盛り上がっていると、自分の参考、自分の勉強にもなりますので、このサイトはこうした教育機能も持っていると思います。

メリットは大体ここまでです。さて、問題点を取り上げると、こういうサイトを作ったとしても、やはり最初からある程度の参加者がいないとなかなか活発なサイトにはならないという面があると思います。つまり、3人とか4人で作るだけでは、多分それほど活発なサイトにならない可能性があります。どうやってできるだけ多くの研究者たちに声をかけて参加してもらえることが大きな問題なのかもしれません。

そして、こういうサイトを管理するには時間が必要です。そのために、こうしたグループブログは今まで主に大学院生によって作られたと思います。大学院生にはある程度の時間の余裕がありますが、研究者にも参加の時間的な余裕があるかどうかという問題があります。また、コメントのセクションを見れば、誰でもコメントを書けるようになっていますけれども、まじめな議論に興味のない、喧嘩を売る人が登場する問題も考えられます。それは健全な議論のさわりになりますので、その場合は、コメントを書きたい人は登録をしないと書けないという仕組みを設けておけば多分大丈夫だと思います。

紹介はここまでにしたいと思います。ちょっと理想的な話となっていて、非現実的などころもあるかもしれませんが、やはり自分もまだ大学院生なので、こういうサイトがあればとてもありがたいと思います。

以上です。

【司会（井上）】 ありがとうございます。私は、全然非現実的とは思いません。多分ほとんどこういうものが発達すると思うんですが。

では、結構時間がたってしまいました。残り 35 分ほどございます。これからは自由討議ということになります。ご発題いただいた方にはいろいろな可能性を示唆していただきました。それこそすぐにでも実行したほうがいいようなものから、なかなか厄介な問題が背後に潜むものまで、さまざまと思いますけれども、どなたの発題に対してでも結構なので、自由に討議したいと思います。

記録の関係上、挙手して名前を言ってから発言をしてください。

質疑応答

【黒崎】 国学院大学の黒崎です。全体として、研究者が持っている暗黙知をどのように顕在化させて、そのギャップを埋めていく努力をオンライン化の中で提供するかという話になっていたような気がします。その中で幾つか具体的な提案というものがあったと思います。ブログやデータベースの連携などは、システムとして幾らでも技術的に可能なことです。問題なのは、それによってどうしたら海外の研究者と日本の研究者の暗黙知のギャップを埋めることができるのか、あるいは専門的な研究者のレベルでの知識と、一般的な神道に関心があるけれど、何か検索語を入れようとしてもわからない、そういうギャップをどうやって埋めるか、ということだと思います。これは、特にヘイヴンズ先生にお伺いしたいんですけども、この解決のために、先ほど事典の1つの項目について複数の人が書くという提案がありましたけれども、ある程度特定のトピックを絞って、そこにある程度リソースを集中して解決していったほうがよいのでしょうか。それとも、全般的に参加できるシステムのほうがよいのでしょうか。

【ヘイヴンズ】 実際、制限された領域だと思います。けれど、例えば、シッケタンツさんが紹介したグループブログのように、そのブログに行けば専門家がある特定の話題について、間違っているとか、知識が古いとか、議論しています。だから、関心のあるところにこのようなことが始まると思います。ただ、全体として、全部がオープンだと思うんです。ただ、全部の項目に対して人が書き込むかどうか、問題だと思うんですね。

【遠藤】 国学院大学の遠藤です。今のヘイヴンズ先生の話に関連してですが、やはり項目について考えていかなければいけないのは、ディスカッションとして完全に開かれているようなスタイルか、それとも限られたバリエーションというか、そういうものを示すのかということだと思います。ここをきちっと意識して区別する必要があると思います。例えばその項目を調べて、項目の説明があるわけですが、その次のレベルとしていきなりブログの議論が出てくると、検索で調べた人がそのブログの議論を見なければいけない。ブログの議論があんまり盛んでない場合はまだ全部見ることはできますが、ある程度分量があるときに、それを全部読まなければいけないということになっていく。ほんとうに専門家であれば、そのブログの議論を見て自分の力でどこが自分にとって適切な知識なのかということ判断できます。一方で、いろいろな意見を書くというやり方でも、例えば研究者の会議みたいな形で、主要で重要な意見をいくつか併記をするというやり方もあれば、完全に開かれた議論というレベルもあると思うんです。だから、事典としてそれを公開していくときに、最初からそのディスカッションの場を見せるというやり方もあれば、複数の人が書くというのは、選ばれた複数の人あるいは複数の意見をきちっと併記するという示し方とがあると思うので、このことは意識をして示していかないと、使う側としてどういふところを求めているのかということにマッチしない場合もあるのではないかと思います。

【司会（井上）】 問題が同時に2つのことに開いたような気がします。最初の、黒崎さんのおっしゃったことは、暗黙知ということですね。ただ私は暗黙知というのをどのレベルで議論するかということをもう少しはつきりさせる必要があると思います。研究者によっても、みな暗黙知が違うわけですね。同じ宗教学でも神道学でも、古代を専門にしている人と近代を専門にしている人の暗黙知は違うわけですね。そうすると、それはもう、個人の問題になってしまう。しかし、例えば日本人の神道に関する一般的な暗黙知と、イギリスの人の暗黙知と、中国人の暗黙知と、韓国人の暗黙知と、こういうことになると、これは個人のレベルではなくて、文化とか、あるいはそれぞれの国における神道理解のレベルという、少し大きな問題になりますよね。その辺、どうなのか、どこレベルで言っているのか。研究者と一般の人というときでも暗黙知の違いがあって、そうすると、例えばグリーンさんは日本の一般人よりも神道に関する暗黙知はあるということになりますね。そのような非常に複雑な関係があると思うので、どういう問題設定なのか、もうちょっと言っていただけると助かります。

【黒崎】 私は、最初どちらかというと個人レベルの話をするつもりでした。ただ、研究機関が取り組む場合には、ある程度、大きな枠の中で動かざるを得ないと思うんですね。それで、先ほどのブログの例でいうと、「Frog in a Well」というサイトの中で、すべての研究者がそこに参加するという形でした。しかしブログというのは、基本的にだれでも自分のサイトを持つことができ、それがお互いにトラックバックによってリンクし合えるというシステムですから、個人個人が議論を始めることは、その人がブログを持てばできるんですね。そういうレベルで解決がつくというシステムが既にあるので、もし大学や研究機関でやるということであれば、ある程度その課題とすべきことというのは、日本とか、中国とか、アメリカとか、韓国とか、そういった1つの文化的な集合体の中での暗黙知、それから日本の宗教学とか日本の神道学のレベルの中での暗黙知というのがどれぐらい理解されているのか、あるいは、どれぐらいその発信がおくれているのかということを示していったってそのギャップを埋めていくようなところにリソースを集中すべきなのかなという気がします。

先ほど、そのリソースを集中するということを言いたかったのはそういうことで、どこにメインのターゲットを絞って、そこを特に集中的に解決していくべきなのかということです。

【テーウェン】 今の議論は方向性が2つあるような気がします。1つは、遠藤さんや井上先生もそうかもしれないですけども、いかにして使いやすい『神道事典』をつくっていくかというのが1つの方向であって、もう1つは、ヘイヴンズさんとかシッケタンツさんが話しているのは、いかにしてこの『神道事典』を使ってネットワークづくりができるのかというその2の方向性があるような気がします。ネットワークづくりに事典を使うと事典としての機能の邪魔になって、事典として使うのならば、ネットワークやフォーラムに相応しいのかどうかということです。結局は、どういう方向でお考えなのでしょう、そこをお尋ねしたいと思いましたけれども。

【司会（井上）】 私自身は、もちろん事典は事典として1つ完結していると考えています。それと研究者フォーラムを展開させるというのは、もう1つ別につくればいいと思っているんです。ただ、翻訳の過程で皆さんが感じたことは、最初は日本人のための事典だったわけですね。執筆した人は国外に向けて英訳されるということは全く考えていなかった。私が個人的に考えていただけなわけです。ですから、それが英語になったという時点で、今その暗黙知の問題を含めてさまざまな問題が出てきてしまったんです。これは、そのプロセス上出てきてしまったことなんですね。最初からみんなに、将来英訳もしますので、そのことも頭に入れて書いてくださいということだったらもっと違ったかもしれないですね。しかし、そうではなかったと。結果的に、英訳したことによってそれをどうは正するかという問題も抱えてしまったわけです。したがって、フォーラム云々という問題も、それは派生的なことなんです。しかし、直接的に結びつく問題としては、これを使いやすくかつ研究者同士の意見交換の場として使っていきたい。それは先ほど言ったずれを直すことです。我々日本人はわかっている、例えば地名なんか、日本人は、北海道にとか鳥取にとか言ってもわかりますけれども、外国人はどこの話だろうと思う人だっているわけですね。そういうようなことを、どのようにクリアできるのかという非常に具体的な問題が出てくるわけです。そのときの議論とかフォーラムという問題が生じますね。そういうことで、暗黙知も多分半分ぐらいはそれにかかわっていて、どうそれを埋めるかということだと思うんです。

【グリーン】 ロンドン大学のグリーンです。黒崎さんとテーウェンさんのコメントを伺って、疑問に思うことがあるんです。要するに国際的・神道研究のネットワークづくりというのは、やはり対象は何なのかという問題が常にあると思うんですね。それは研究者を対象にネットワークを形成していくのか、それとも専門的な知識を有しない、ただ神道に関心を持っている人だけを対象にしてネットワークをつくるのかという、要するに優先するのはどちらかという問題があると思います。僕としてはやっぱり、あくまでも研究者を対象につくっていくべきもので、神道に対して専門的な知識を持っていない人たちは二の次。どうも今までの議論の中では、対象をどうするかという問題が潜んでいる気がします。いかがですか。

【司会（井上）】 これもひょっとしたら国によって違うかなと思うんですが、もとの『神道事典』ということを考えますと、実は、初版から入れるとトータルで1万数千部以上売られています。1万数千部売れるということは、図書館だけではなくて、実際読むか使うかは別問題として学生なども利用する。神道文化学部（神道文化学系）の学生もかなりの学生が購入するわけです。ということは、学術的に使うと同時に一般の学生や図書館で関心を持った人が使う場合もある。そういう人から質問が来ることもあります。ここは間違いではないかというのが来たこともあります。だから、なかなか読者層の想定というのが難しい。一定程度の知識を持っているとは言えます。でも、ほんとうに神道を専門にしている人だけに読まれているかということとそうではない。500部とか600部というような限定的な書籍に比べて、かなり売れているので、問題が広がります。

では、例えばイギリスで『神道事典』と同じような事典をつくったときにどの程度の人が読むのか、利用するのか。この点は、国によって違うような気がするんですね。日本の場合、研究者と一般の人とがかなり連続していることが多い。普通のサラリーマンでも大学の先生より知識の深い人はいっぱいいます。これは、ほんとうに感じます。大学の先生でも、自分が専門的に研究しているところは詳しいけれども、そこから外れると、一般常識があまりないという人も少なくありません。そうしますと、神道全体になると、むしろ好きで読んでいるサラリーマンのほうがよっぽどの質問をすることがあるんです。そういうことが例えばイギリスではどうなのか、ノルウェーではどうなのか、韓国や中国ではどうなのかという、それも実は暗黙知にかかわってくることなのです。

したがって、我々がこのように英語に翻訳したときに、それぞれの国でそれがどういう問題になるかはよくわからない。少なくとも事典、日本語の事典をつくったときには、それは幅広い利用が想定される。もちろん主たるターゲットは研究者です。けれども、今言ったようなことで、一般人も実は使っているんです。そういう広さを持っているので、グリーンさんの質問に答えるときに、正確に答えられないというのは、そういう状況もあるんです。

【ヘイヴンズ】 比喩として暗黙知とか宝石のファセットを取り出したのは、一般の人が事典を読むと暗黙知の問題が出ると思うんです。専門家にとっては調べることはできるんです。何か知らないことがあったら、すでに日本語も知っていて、少なくともどこに行けばその情報があるかわかると思うんです。だけど、一般の人が日本について何も知識がないと、その暗黙知のギャップを補う機能があればいいと思うんです。それは、専門家によるブログであろうが、リンクされた小さな記事とかであろうが、いろいろな方法があると思うんです。

【江島】 日本文化研究所共同研究員の江島と申します。

この第Ⅲグループというものの自体が国際的発信を目的とされて組織されているということで、このような外国並びに日本の暗黙知の話になってくるのはよくわかります。例えば昨日のグリーン先生のご発表の中で、国際的なものへのグループとそうではないグループの二極化の指摘がありました。これは神道研究の拠点が国学院になることを考えますと、やはり日本の研究者がグループとなって、対外的なものに対しても問題関心を広げていかなければならないと思うんです。それは神道文化の学生もしっかりと対外的に発信をしていける、若手育成のためにも、そういうような関心を醸造していくことこそ拠点形成として意味があるのだらうと思います。

そこで、私は、EOSのシステムに協力させてもらっていますので、その具体的な1つの案として——著作権の問題はよくわかりませんが——EOSに日本語の原文を載せるのはいかがでしょうか。これは、外国語が不得手な日本人の神道研究者にとって、日本語とその英訳を読んで、英語での表現の仕方が学べると思うんです。ほかには中高生は、事典を引くよりもインターネットで情報収集するほうが頻度としては多いと思います。そういうような中高生にとっても、日本語で書かれたものが英語でこのように表現されるのだ

とわかると思います。さらには、外国人研究者、もしくは外国人がE O Sを使った場合に、英語で表現されているものは日本語ではこういうふうに表示するのだというのは相互的な効果が見込めるのではないかと思います、このような提案を1つさせていただきます。いかがでしょうか。

【司会（井上）】 いや、それは不可能です。もうそれはできるならとつくにやっています。日本語の事典は弘文堂という出版社から出しているわけですから。それをネットで出すことを許可するということは、営利上あり得ないということです。弘文堂が事典を絶版にして、それでネット上だけでということになれば可能ですが、基本的に無理ということですね。少しこちらで内容をわかりやすくして、この項目はこうですと新たに書き足して、詳しくは日本語の事典、それから、その英訳されたものはオンラインと、ここまでの努力をすれば擬似的なそれに近いことは可能ですけれどもね。

【真田】 埼玉学園大学の真田です。

暗黙知というお話が出ていましたけれども、ヘイヴンズ先生は、それについて研究フォーラムとリンクさせたい、あるいはいろいろな展開をそこへ出したほうがいいというご意見のようですが、神道研究の方々は、議論をすることはとてもおもしろい、そこに興味がおありになるだろうと思うんですね。それから、研究者であれば、違う分野の方でも、このところがホットになっている話題なのだというのは、それなりに同じ研究者として興味を持つだろうと思います。けれども、なぜ事典を引くのかという原点に帰ると、周辺の人たちでも、一般の人たちは別として、用途の原点は何かわからないから引くわけですね。その英文で書かれたものは、おそらくその日本語の翻訳である。そこに何か足りないということをヘイヴンズ先生やほかの翻訳チームの方は感じていらして、何かそこに足したほうがいいだろうと思われている。だけれども、著作権上やっぱり改編できないとか、何か、あとホットなディスカッションがあるとか、そこに問題があると思っていらっしゃるということですね。そうしたら、例えばそこに、翻訳チームとしての解説を固定的なものとしてつけ加えて、そこから議論に行くなり何なり、その先はいろいろ広がりがあると思うんですけれども。何か記事を補完するものは、とりあえず注の形で固定してしまうというのも一案ではないかと思うんですね。遠藤先生がおっしゃったように、記事があつていきなり議論に行くと、わからなくて引いたのにさらに混乱するという可能性もあると思います。ですから、その両者のバランスをとるには、間のところを何か。

【ヘイヴンズ】 解説をする。

【真田】 それで『神道事典』の著作物ではなくて、翻訳した国学院のチームの見解であるということで何かお出しになる。あるいは、その見解に対して質問が寄せられるでしょうから、場合によってはWebでアンケートをとってもいいと思うんです。そういう中からわからない所があれば、その解説を今後充実させていくと、そういうこともできるのではないかと思いますね。どうでしょうか。

【ヘイヴンズ】 確かにそれは1つの手として考えることはできると思います。私が考えていたのは、研究者のネットワーキングの一部として外部の人もそれに参加できるよ

うに、小さなコメントでも解説でもいいし、自分の独立した記事を書いてもらうとか、*Digital Dictionary of Buddhism* のようにいろいろな人に参加させるとかね。それは頭の中にあったので外部の人も含めようとしたんですけどもね。

【稲場】 神戸大学の稲場です。

今の真田先生の提案とヘイヴンズ先生の応答を含めて、提案ですけども、まず、EOSは固定されたものとして、コアドキュメントとしてサイト上に置く。その下にコンプリメンタリードキュメントあるいはサブドキュメントとして3つぐらいの系統立てたものを各項目に置くというのはどうでしょうか。

1つは、先ほどの暗黙知を是正する記述。これは翻訳チームが解説を入れたほうがいいというのをまず1つ置く。それから、一般向けに理解しやすい解説は、別の観点から短くまとめたようなものをさらに置く。それからもう1つ、研究者向けのホットな話題、新たな研究成果、そういったディスカッションを含めたものをどこかのフォーラムで別に設けて、ある程度まとめたものをまたサブドキュメントに置くと。そういう3つを1つの項目に対して、コアドキュメントに対して張りつけるという形をやっていくというのは技術的にも難しいことではないし、そういう形をとれば、事典を引いた側が、自分はただこの項目について知りたかっただけだと、だからサブドキュメントの解説をちょっと読む程度でいい。あるいは、研究者だったらサブドキュメントのホットな話題、フォーラムの内容も読みたいとか、サービスを提供する側としてはそういうやり方もあるのではないかと思います。

【司会（井上）】 ほかにありませんか。

大分時間が迫ってきましたが、非常に具体的な提案をいただきましたので、私は実現できるものはしたいと思っているんですが、ほかの話題もあつたら、先ほどの発題、幾つかありましたので、いかがでしょうか。かなりの部分は今まででカバーはしているんですけども。

【テーウェン】 1つだけごく具体的な提案があるんですけども、グリーンさんと私も、井上先生が編集した『神道——日本生まれの宗教システム』（新曜社、1998年）という本を英語に翻訳したんですけども、同じ問題がもちろんありました。そこで、英語にしたら一番欠かせないこととしては、英語による神道文献をつけ加えること、その記事についてもっと知りたい人のためにここを読めばいいというのがありますよね。そこに英語による神道研究とか、英語の論文を入れることが大変大事なんですよね。だから、英語圏の学生たちが、例えば神社という項目を読んだ後には、その後に日本語の論文がもっと知りたい人のためにという形で出てきても読みようがないんだから、日本語が読めないならこれがありますよというような、英語の文献をつけ加えることが簡単にできると思いますし、非常に価値があると思いますけれども。もうついていますか。

【平藤】 まだついてないです。

【テーウェン】 ついてないですよ。それが非常に大事だと思います。

【平藤】 私としては、そういう参考文献、例えば、ウィリアム・G・アストン (William

George Aston) の『神道』(青土社、2001 年) とか、そういったような英語で神道を解説したものの一覧というものをつけたらいいなというふうに思います。

【テーウェン】　　すごく古いものしか入っていないような気がしますけれども。

【平藤】　　今挙げたのはそうですけれども。

【テーウェン】　　アストンとかね。

【平藤】　　もちろん最近のものまで英語の、まずは英語のものを挙げて、いろいろな国で出ているものとかも含めて、EOSで一覧表にして出すということをしたらいいというふうに個人的には考えています。

【門屋温】　　早稲田大学の門屋です。

インターネットの有効利用というようなご提案で、どんどん実現していったほしいのですが、ただ、聞いていて気になったのは、シッケタンツさんの発題を除いては、どれも国学院が持つコンテンツをいかに発信するかという方向性ばかりで、テーウェンさんが言われたように、実は海外でもいろいろな研究があるけれども、それを取り込むような方向性というものがあまり今の提案にはなかったと思います。今ずっと議論されているネット上ではさまざまな情報共有がどんどん起きていて、ものすごいスピードで進化しているわけですね。その中で、シッケタンツさんが出されたあれではないですが、国学院自体が「Frog in a Well」にならないようにするには、そういったものを、どんどん英語の新しい最新の研究文献なんかを取り込んで、一遍それをストックしてまた発信するというのをやっていかないと、出すばかりだと要するに出超になってしまいますよね、入れるほうもやらないと。それをどうするのかというのがちょっと見えなかった気がするんですが、

【司会 (井上)】　　もちろんそれは当初から考えていたことなんです。ただ、問題は、国学院のスタッフだけではできないということはあると思います。それで、そのためにネットワークをつくって、先ほど、稲場さんからも指摘されましたけれども、3つぐらいのレベルとありましたけれども、翻訳したチームが責任を持ってつけるような補注とかそういう部分ですね。それと、もっといろいろつけ加えなければいけない解説とか、それから文献とか、これはもう外に開かないと到底我々ではできないというふうに思っています。そのために、差し当たっては翻訳してもらったグループ、大体 30 名以上ですかね。

【ハイヴンズ】　　38 名。

【司会 (井上)】　　38 名ですね。その人たちのフォーラムというのがまず 1 つの核になると思うんです。それに何人かつけ加えて、コンテンツをつくるのもあると思っています。それは、3 月に本文が終わった後の作業として想定してしまっていて、全然それを考えていなかったわけではないんです。手続的に翻訳を最優先したのでそういうことになったということです。だから、今おっしゃったように、国内の文献を紹介してもしょうがないのであそこは翻訳しなかったんです。「さらに知りたい人のために」は、あえて翻訳しませんでした。当然その部分は、今おっしゃったような海外の文献が入ってこないといけないので。

【藤井】　　国学院の藤井と申します。

EOSで画像関係を担当させていただいておりますので、その観点から一言述べさせていただきます。先ほども平藤さんと武井さんが外部機関とのリンクということをおっしゃっていたと思います。例えば動画ですね、神社関係、お祭り関係の動画がどのぐらいデータベース、オンライン上で公開されているかということを見てみたんですが、非常に少ないですが、若干はあるんですね。例えば、秋田県立図書館のサイト (<http://www.apl.pref.akita.jp/>) では、秋田県内のお祭りの動画が配信されております。あとは、鳥取県立博物館のサイト (<http://www.pref.tottori.jp/museum/>)、あとは兵庫県立歴史博物館 (<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/>)、その程度でしかないんですが、配信されているところがあります。今のご質問とも絡みますが、国学院でこれから、神社史料として神社の資料編、『神道事典』の資料編に関して、写真や動画を充実させていく必要があると思うんです。しかし、お祭り関係を全国的に国学院のスタッフだけで撮影することになると、非常に莫大な時間とお金と労力がかかります。非常に意味はあるかと思いますが、難しいことだと思います。そこで、少ないですけれども県立機関のレベルでやっているところがございますので、そういうところと連携をするのはいかがでしょうか。公的機関でありますので、信頼はできると思います。単にリンクを張るだけで終わらせるのか、もう少し内容を踏み込んで協力するのかというのは検討をしないといけませんが、国学院のコンテンツとして発信するのではなくて、現地で、各地でやられているものを協力しながら神社史料というものを発信していければということにはちょっと考えております。

【司会（井上）】 それに関しては、可能かどうかはわからないけれども、私のビジョンを言いますと、ユーチューブ (YouTube <http://www.youtube.com/>) みたいなものを国学院でつくって、世界中から動画を投稿してもらおうですよ。投稿されたものを採択するということです。すべて無料で提供してもらるか、場合によって若干の謝礼を出すといった余裕が国学院にあるかは別問題として、もうリンクだけでは間に合わない。今のユーチューブなんかを見ていただくとわかりますけれども、多くの人が投稿して動画を出しておりますね。これは、ブロードバンドがもっと広まりますと、普通の人々が撮った動画を加工して投稿するとか、あるいは加工せずに投稿することが可能ですし、簡単になる。著作権をどうするかとか、その採択、それから、投稿した人のアイデンティファイをどうするとかの問題はもちろんあります。ただ、長期的に見ると、おそらくそうなると思います。どこかとリンクすることも、それはそれでいいと思うんですけれども、独自につくっていく上では、多くの人から、ここではそういうものを集めているんだと知ってもらう。だれだれが撮影したものをこういうふうに配信する。これは研究所がその人の制作物に対してある種認定したことになりますね。お祭りのこういうおもしろいのをこういう人が撮ってくれたと、それはほんとうであると、その人が確かに撮ったものである、そのお祭りであるということがわかった場合には、それを採用してその人の作品として載せるというね。

今、大学院のゼミでそれをやっています。授業の一環としてまず撮らせているわけですよ。実はこれは、予行演習のつもりなんです、一般の人からの応募の予行演習のつもりでちょっとやらせている。

だから、こういうツールは今のレベルを見てはいけないので、2年後、3年後はどうなるかということはある程度想定しなくてはいけない、大変難しいんですけどもね。

【黒崎】 その中間があると思うんです。今、学校教育の中で、小学校、中学校、高校の教育の中で情報教育というのが義務化されて、では何をやるかということで、地域の伝統文化を記録したりとか、それを発信したりということをやらせている、そういうカリキュラムを組んでいる中学校、高校とかは結構あるんですね。ですから、場合によっては、そういった、これは公立あるいは私立もありますけれども、正式な学校という機関ですから、そこと提携して、そこで作成した、学生、生徒たちが撮ったものを、もちろん相手先の神社などにも許可を得たものを公開する。そういう提携の仕方はあると思います。

【司会（井上）】 時間がオーバーしてしましまして、非常に議論が盛んになりましたのもったいないのですが、午後、違うグループの発表もあって、話のレベルも膨らむと思いますので、だんだんその議論の深みを増していきたいと思います。

それでは、一応予定に従ってやりたいと思いますので、1時から第2セッションをということで、お昼休みにさせていただきます。どうもありがとうございました。